
春、陽だまりの中で。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春、陽だまりの中で。

【Nコード】

N3084E

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

中学時代の元彼「シン」を思い出してしまう綾音と、綾音に初恋をした「シン」。シンという言葉を聞くだけで傷つく綾音に新は優しく手を差し伸べた。「それは思い出しに、俺と新しく恋を始めよう」…春、暖かい陽気の中での淡いラブストーリー。

「あーやねっ」

「あ、偶然！なにしてんの？」

同じ部活の美里と大学の敷地内を歩いていると、後ろから自分を呼ぶ声がした。

振り返ると、愛おしい人の笑った姿。

「いやー生協でちょっとパンでも食おっかなと思ってさ」

「あはは、いいねえ。今日も体育あったの？」

「そりゃもちろん」

綾音がそう言うと、彼はガッツポーズをしながら答えた。

半ズボンにＴシャツを着ていて、いかにもスポーツしてそうな身なり。

美里がいたからあまり長く話してちゃ悪いと思って、「それじゃあまたね」と手を軽く振ると彼も「おう、またなっ」と元気よく答えた。

その光景を見ていた美里は不思議そうに綾音に尋ねてくる。

「あの人教育学部の体育専攻科の人？」

「そ。おもしろい奴っしょー」

「うん。しかもかつこ良いね」

美里がそう言ったから綾音は「えー、そうかあ？」と言い返したけど、内心では美里と同じことを思ってる。

かつこ良いなんてもんじゃない。

医学部の綾音と教育学部の彼。

どこで知り合ったかと言うと、体育が偶然同じだっただけ。

数ある中から種目を選べるんだけど、偶然同じになって一緒にやってくうちに仲良くなった。

話しかけてきたのは、向こうからだった。

『ねー、なんて名前？』

『え？えーと、綾音？』

突拍子のことだったから、ちょっと驚いて語尾にクエスチョンマークを付けると、その男の子はブハッと吹きだして笑った。

『なんでハテナつけるー？』

その笑顔1つにやられた。

大声で笑っているその彼の笑顔がとても愛らしくて、ドキッとしてしまった。

知り合ってからまだ2週間しか経ってない。

けど体育以外でも敷地内で会ったときとかに話したりはするようになった。

いつもジャージの彼。

体育専攻科の人はみんなそう。

だからジャージを着ている人がいるとつい目で追ってしまう。
彼じゃないかな、彼だといいな……って。

実は名前も聞きそびれて知らない。

何県出身かも知らない。

学部学科、それくらいしか知らない。

けど、好きになった。

ようやく新しい恋、できると思った。

「じゃー次は綾音の恋バナね！」

最近によく同じ部活の1年の子の家を夜行き来している。

今日は綾音んちで遊ぶことになり、バレー部の子たちが集まる。

テレビ見て笑って、飲んで食べて喋って。

楽しいひと時。

「んーそつだなあ、なに言えば良いかなあ」

お決まりの恋バナ。

女の子たちの会話にはつきもの。

ほかの子も順番に言っつて、次は綾音の番になる。

「じゃ最後に付き合ったのは？」

「最後は中3かな。高校のときは好きな人できなくて」

「へえ、いつ？」

「えーと、1月くらいから高1の4月の頭にかけて」

みんな恋バナとなると興味津々になる。

綾音だってほかの人の聞くのは大好き。

でも、自分のこととなると…ね。

嘘は言わないけど、やっぱり後ろめたい気持ちはある。

「どっちから？なんで別れたのー？」

みんなの催促に答えるように、綾音は喋りだす。

「向こうから。あのね、綾音ほんとは卒業した高校より1こ上のランクの高校行くつもりだったの。けど、彼がうちの高校行ってくて言ったから綾音もそうした」

よみがえる過去。

これ話すのは、はじめてかもしれない。

誰にも言わないでいた。

そもそも綾音たちが付き合ってることを知ってる人もそんなに多くなかった。

だから高校でその手の話題に触れられることはなかった。

中学生なんて、ほんとに子供だったのかもしれない。
自分でもバカだっと思う。

けど、きっと今同じ状況になったら同じことを繰り返すんだろうな
って思ってる自分は、もっと子供だ。

うぬばれていたのかな。

好きだったのは、綾音だけだったのかな…

『ねー、慎ちゃん。願書書き終わった？』

『まだー』

のぞき込むように見ると、彼は願書を隠すように手を置いて、ハハと薄ら笑いをした。

そのときから違和感を感じていた。

願書も見せてくれないし、受験についての話題はいつさい避けられていた。

それ系のことを言っても、笑ってはぐらかされるか話題を変えられるかのどっちかだった。

鈍い綾音にだって分かった。

なんか隠してる、と。

それが決定的になったのは、それから3日後のこと。

願書なんてとつくに書き終えて暇していた綾音はいつものように慎ちゃんの席に言って話しかけた。

慎ちゃんもいつものごとく笑って答える。

どうしても願書が気になった綾音は、話している隙に願書をヒョイと取り上げる。

『あつ…！』

慎ちゃんのしまった、というような顔が目に入った。

次の瞬間には目を丸くした。

志望校の欄には、近くの工業高校の名前が書かれていた。

綾音と同じ高校じゃなく、工業。

なんかの間違いかと思い、ううん、間違いであって欲しくて、綾音は慎ちゃんにおそろおそろ尋ねた。

『工業…行くの？』

違うって言って欲しかった。

誰かが勝手に書いたんだって言って欲しかった。

微笑している綾音を見て慎ちゃんは、少し間が置いてから罰が悪そうなお顔をしながら言った。

『…うん……』

嘘だと、そんなことないと、これは夢だと思いたかった。

涙が出そうになるのを笑って堪え、「そうなんだ」と言い残しその場を離れた。

どうして変えたの？

どうして黙ってたの？

綾音のこと嫌いになったの？

聞きたいことは山ほどあった。

けど、言葉にならなかった。

慎ちゃんの返事は、まるで別れを告げられたかのように感じる。

しばらくするとお互いなんでもなかったように、いつものように仲良く話し始める。

綾音も慎ちゃんも、なにかに怯えているかのように高校のことについて決して触れなかった。

もともとお互い筆不精で、メールとかこまめにしていなく、だから

といって電話をしていたわけでもない。

学校で話せる、それだけで十分だった。

けど、高校は離れるからそうもいかない。

筆不精だけどメールくらい送ろうと思えばいつでも送れた。

近隣校なんだから会いに行こうと思えば行けた。

けど、綾音はそうしなかった。

慎ちゃんも、なにもしなかった。

そのまま時はすぎ綾音たちは自然消滅した。

中学の卒業式を最後に、会うことはなかった。

2年のときに偶然街で再会したときには、慎ちゃんの隣には彼女がいた。

綾音がいた場所に、違う女の子がいる。

たったそれだけのことで、ああ…ほんとに別れてたんだという実感が沸いた。

「えゝその男ひどくない？」

「ねえ。普通黙ってる？ありえないよお」

綾音の話を聞いていたみんなは、プンプンと怒りながら言った。

すると、1人が言った。

「綾音ほんとに好きだったの？」

怪訝そうな顔をしながら言うその子を一瞬見つめた。

「好きじゃなきゃ付き合わないよ」

いや、好きだった？

そんなもんじゃない。

山よりも高く海よりも深く…なんて言葉には収まりきれないくらい、愛してた。

しょせんは子供のお遊びの恋、なんて思うかもしれないけど、それでもあの頃の綾音にとっては人生で最大最高の恋愛だったの。

「だったらもつとメールとかすれば良かったのに」

そうは言っけれど、とてもそんなことはできなかった。

高校を変えたのは、綾音に黙ってたのは、なにか理由があるからだ。綾音には言えない理由が。

それを聞くのが怖くて、隠してしまいたかったの。

綾音のこと好きじゃなくなっただ…って言われるのがなによりも怖かった。

「良いの良いの。綾音はそういう奴なの。さ、次はミズキだよー！」

高校のときに好きな人がいなかったのは、作らなかったんじゃない
て偶然でしなかつただけ。

慎ちゃんのこととは関係ない。

告白してきてくれた人たちもいたけど、中2のときに好きじゃない
人と付き合っただけ失敗したことあったから受け入れなかった。

最愛の人とだけ付き合っただけ決めてた。

念願の最愛の人との恋は、儚く消え散っていったけれども…。

「おっはよー、真理子ちゃん！」

朝、道を歩いているときに偶然会った、大学での友達1号のミズキと歩いていると真理子ちゃんを見つけたから、あいさつをした。

真理子ちゃんも仲が良くて、いつも一緒にいる。

「おはよ、真ちゃん」

ミズキが言った言葉に耳がピクツと動く。

ミズキは「まりこちゃん」のことを「しんちゃん」と呼んだ。
今更だけど、でもほんとに今気づいた。

「おはよう、2人とも」

あいさつを仕返してくれる真理子ちゃんをよそに、綾音はミズキに尋ねた。

「ねえ、なんで真ちゃんなの？」
「あー、えつとね…」

ちょうどそのとき、いつものように後ろから声がした。
あの愛しい声で綾音の名前を呼ぶ人。

今日は友達も一緒のようで、彼より少し背の高い茶髪の人。

「あ、おはよ。朝会うのはじめてだね」
「だな。あ、友達？」
「そう。こっちがミズキ。でこっちが真理子ちゃんなの」

そう紹介すると、彼は「へえ、俺綾音の友達。よろしくなっ」と
可愛い笑顔で言った。

すると真理子ちゃんはちょっとだけ顔を赤くしながら言った。

「あ、どうも。あたし真って呼ばれてるんだ」
「へえ？真理子なの？」
「うん。真理子の真がシンって読むから。高校のときもずっとそう
呼ばれてたんだ」

真理子ちゃんがそう説明すると、彼は笑いながら「あーそっか！なるほど！」と楽しそうに言った。

その光景を見ていると、なんだかとてもイライラしてくる。

嫉妬？ううん、違う。

彼は人なつっこいからいろんな女の子と喋るから、別に真理子ちゃんと喋っててもなにも感じない。

いや…感じないって言ったら嘘になる。

真理子ちゃんまで彼を好きになったらどうしようって不安もある。

それと

かつて綾音が愛した人のあだ名が真理子ちゃんと一緒に、なんとも言えないような憤りを感じるの。

あの頃慎ちゃんを慎ちゃんと呼ぶのは綾音だけだった。
本名は慎二。

綾音だけの特別なものだった。

そのあだ名は慎ちゃんだけに付けた、大切なもの。
ほかの人をそんな風に呼びたくない。

勝手だけど、でも…

「綾音も真ちゃんの良いよー？」

真理子ちゃんはクルツと綾音のほうを向いて言った。

は？と心の中で叫ぶ。

なにを言っているの？バカじゃないの？と、友達のはずの真理子ちゃんが心の中で蔑んでいる。

「……………なんで…？」

「え？」

唇をギュツとかみ締めて葛藤に耐えているそばで、なにも知らない彼は「そっちのほうが親しみあるじゃん、そうしたら？」と言う。

好きで別れたんじゃない元彼の名前を呼べという、今愛している彼に言われて複雑な心境になって、つい我を忘れてしまい、気づけばひどいことを言っていた。

「綾音呼ばない。絶対呼ばない」

「え？」

「死んでも真ちゃんなんて呼ばないから！バカ！！」

言いたいことだけ言って、その場を走り去った。

彼やミズキちゃんが綾音の名前を呼ぶ声が聞こえたけど、立ち止まらずにそのまま走った。

完璧綾音が悪い。

自分でも分かってる…

なのに、どうしても嫌だった。

だって、愛していたの。

ほんとにたかが15歳の恋だけど、高校も大学もその先もずっと一緒にいたいって思える最愛の人だった。

慎ちゃんに通うはずだった高校に慎ちゃんはいなくて、笑っている毎日空っぽの日々だった。

離れてても、連絡取れなくても心だけは繋がっていると…信じていたかった。

『あ、慎ちゃん！久しぶり…』

『あつ…綾音』

見かけなきや良かった。

声なんてかけなければ良かった。

彼の隣にはウェーブのかかった長い髪の女の子がいた。

慎ちゃんは好きでもない女の子と2人で出かけることはしない。だから一瞬でその子が彼女だと分かった。

『…あ、あー、彼女？やるじゃん！』

期待なんて、すぐに消えた。

『あはは、まあ一応ね。綾音は？』

笑うあなたの顔、1日たりとも忘れたことはありません。

その笑顔に、その優しさに惚れたの。

綾音はずっと覚えてた。

席が近くなったときのこと、期末試験でジューズ賭けたことも、すべて。

『綾音はねー好きな人できたんだ。だから今健闘中』

とっさについた嘘。

でも慎ちゃんは真に受けて言った。

『綾音なら絶対大丈夫だよ。頑張れよ！』
『うん、ありがと！』

慎ちゃんとバイバイしたあと、棚に隠れて慎ちゃんたちの会話を少しだけ盗み聞きした。

悪趣味だとは思っけど、確かめたかった。

彼女が慎ちゃんのことをなんて呼んでいるのか…

会話を聞いていると、彼女は慎ちゃんのことを「慎二」と呼んでいた。

ホッとした自分がいた。

もう綾音たちは終わったことなのに、それでもやっぱり特別でいてほしかった。

慎ちゃん以外にも彼氏はいたけれど、でも慎ちゃんの場合は嫌いで別れたわけじゃないから…

適当に走っていると、敷地の奥のほうまで来た。
体育館のすぐそばだ。

そつえば今日は日程が変わって1限が体育になったんだっけ…
もうとつくに授業始まっちゃってる。

綾音と彼を繋ぐ唯一の授業なのに。

さっき変に思っただろうな。

バカなヒステリー女だって思ったかな…

…どうして上手くいかないんだろう。

人なんか好きにならなければ、真理子ちゃんにだってひどいこと言う必要なかったのに。

綾音、どうしようもないバカだ…

1限の体育に綾音が来なかった。

いつもなら楽しく競ってるところだったのに。

「おい、しーん。置いてくぞ?」

体育が終わって更衣室でボーツとしている俺に、親友の啓が言った。

「あ、ああ…わり」

「そっぴゃあの子いなかったな」

「んあ？」

「ほらー、新と仲良い看護科の」

ああ…綾音のことか。

さっきどうしたんだろう。

なんであんな…

綾音が誰かを悪く言うなんて考えられない。

普段ポワ…っとして何考えてるか分からないけど、俺が知ってる

綾音は人を傷つけるようなことはしない。

…いや、待てよ。

俺が知ってる綾音？

俺が綾音のなにを知ってると言っただ。

まだ2週間しか経ってないし、名前と学科しか知らない。

「やっぱさっきの原因なのかねえ」

啓は考え込むように言った。

そうか、そういえばこいつも一緒にいたんだっけか。

「なんだろうーな、あれ。でも…なんか聞いちゃいけないような気がする」

「なんで？」

「なんでって、だって知り合ってまだ浅いし…それに…」

ゴニョゴニョと珍しく情けないことを言う俺に、啓はパンツと背中を叩いた。

「いってー！なんだよっ啓！！」

「お前らしくねえんだよ。もっと堂々としててゲラゲラ笑ってんのがお前だろ！」

「啓…」

「いけよ。適当に言っというてやつから」

啓は二カツと笑ってピースをした。

「…おつ、さんきゅ！」

俺はまだ汗のかいたＴシャツを着たまま、更衣室を走って出た。

もしかしたら2限は授業に出るから、もうそっちに行ってるかもしれない。

いや、むしろ2限すらないかもしれない。

もう家かもしれない。

俺、ほんとにあいつのことなんも知らねえんだ。

けど、けど気になる。

気になってしょーがねえんだ。

はじめて会ったとき、綾音に話しかけた最初の理由は、髪を横で1つに縛っている後姿が幼馴染と同じだったから。

性格も一緒なのかなって面白半分で話しかけただけだった。

けど、返事をもらったその瞬間から俺は本気であいつに惹かれた。

負けず嫌いなところも、笑った顔も大好きなんだ。

「くそっ…どこにいんだよっ」

ちょうど学食のある食堂の前を通りかかったとき、今朝綾音と一緒にいた子たちが歩いているのを見かけた。

とくに気にせず走り去ろうとしたとき、向こうが俺に気づいて俺を呼び止めた。

反射的に立ち止まって、「なに？」と聞くと、確かミズキって名前だった子がおずおずと言った。

「あの…綾音授業出てた？」

「いや」

「やつぱり。でね、この前みんなで恋バナしてるときに綾音が言ってたんだけど…」

「え？」

ミズキちゃんは気まずそうに話し出す。

中学時代の恋人のこと。

すれ違いが起こってそのまま自然消滅したこと。
再会したときにはもう向こうには彼女がいたこと。

けど、それとこれとなんの関係が…

「元彼の名前がシンだったんじゃないかって思うの」
「…えー？」

「綾音は好きで別れたわけじゃないから、きっとまだ未練があるのかもしれない。だから、もし元彼がシンって名前だったらやつぱり呼びたくないのかなあって」

ああ、そういうことか…

なるほど、その線も考えられる。

自然消滅…か。

確かにそれは未練も残るんだろうな。

でも中学のときのことだろ？

その間にもシンなんて名前の奴いっぱいいたんじゃないのか？

「あたし…ひどいこと言っちゃった。綾音きつとすごい傷ついてる」

真理子という名の子は、今にも泣きそうな顔をしながら言った。

…今も好きなんだろうか。

だからあんなに怒ったりしたのかな。

でも、ここにはいないんだろ？

もう彼女がいるんだろ？

俺じゃ…俺じゃダメなのか？

「…大丈夫だよ、綾音はそんなヤワじゃない」

「けど…」

「俺綾音探すからさ、2人は授業出て」

俺の言葉に、2人は自分たちも探すと言った。

けど、俺はその申し出をすぐに断った。

「俺、勝ちたいんだ」

そう言つて、「じゃ」と一言残してまた走り出す。

そう、負けたくないんだ。

そんな過去の奴なんかに負けたくない。

もうとつくの昔のことで、忘れなきゃいけないんだ。

そういえば俺綾音に俺の名前すら教えていない。

それで勝ちたいなんて都合良すぎるかもしれない。

けど、綾音が愛した男より、もっとずっと綾音が好きだって胸を張って言える。

関係なくなかない。

俺が綾音が好きだという時点で、もう完璧に立派な関係者だ。

敷地内をグルグル探し回るけど、一向に綾音の姿はない。

ベンチに座ってる奴とかにいろいろ聞いてみても、みんな知らないようだ。

どこにいらっしゃるの…

せめてアドくらい交換しとけば良かった。

体力に自信がある俺も、こうずっと走り続けていたんじゃ疲れる。はあはあと息が切れる上に、この暑さ。

最悪。

でも、俺が疲れることよりも綾音が傷つくほうがよっぽど嫌だ。

綾音の心をそいつがむしばんでいるというのなら、救ってやりたいんだ。

俺のこの手で。

「…あ」

ふと思いつく。

そういえば探してない場所が1つだけあった。

敷地内はもう3回くらい回ったけど、あそこだけは行ってない。

向きを変えて、その場所へと走り出した。

たぶん…いや、きっとそこにいる。

確証はないけど俺の心がそう言ってる。

その場所に着くと、なにやらボールの音がした。

そーっとのぞき込むと、バレーボールを使って遊んでいる綾音の姿が目に入る。

「いた…」

体育館にいるとは盲点だった。

俺らが授業終えたあと、ここに入っただんだな。

灯台下暗しってこのことを言っただろうな。

俺は流れる汗を袖で拭き、綾音に近づいた。

足音に気づいた綾音は俺のほうを振り向き、俺だと分かれると罰の悪

そんな顔をしてプイツと違うほうを向いた。

「綾音」

茶色い髪の毛を横で1つに縛ってる綾音。

その髪型しか見たことないから、いまや綾音のトレードマークになっている。

けど毎日違う色のゴムをつけていて、今日はなに色だろうと考える自分になんとか笑えてる自分がいたんだ。

「なあ、俺新谷平次っていうんだ」

俺がそう言つと、綾音はバツとこっちを振り向いた。
はじめて語る自分の名。

さっきの彼女たちの話がもし本当だったとしたら…

「新って呼ばれてる。女子では新ちゃんって呼ぶ子もいる」

綾音は俺の言葉を聞いて、少しだけ切なそうな顔をする。

やっぱりそうなんだ。

「…慎ちゃんはどうな奴だった？」

「は…」

「俺みたいな男？それとも文化系？女っぽいとか」

面白おかしく言うと、綾音は持っていたボールで直上パスをしながら言った。

「…笑った顔が可愛くて、優しかった」

「高校のこと、聞けば良かったのに」

「聞けないもん。綾音のこと嫌いだったから変えたって言われたらヤダし」

「でも自然消滅のほうが好きだろ」

ズケズケと言う俺に、綾音はボールを床に置いてキッと睨んだ。

「なにが分かるの？！面と向かって振られるほうが嫌に決まってるじゃん！綾音は本気で好きだったんだからっ！！」

こんなに熱い綾音はじめて見る。

「愛してたもん！ずっとずっと誰よりも…っ」

感極まったのか、綾音はポロポロと涙を流した。

そして袖で急いで拭く。

「でも、結局それが綾音を縛り付けてる」

俺なんかよりも20センチは低い綾音。

なにも知らなくても、知り合ったばかりでも、恋しちゃいけないなんて法則はない。

「シンなんて、この世には何万人といるんだ。お前はそいつら全員にさっきの子と同じことを言うのか？」

すぐ目の前にいる。

触れられる距離にいる。

けど、手を出せない。

好きな子が目の前で泣いているのに、ギュッと抱きしめてやることなんてできない。

幼馴染みにならできるのに。

髪型が似てたって、俺の幼馴染みと綾音に対する感情はまったくの別物だということか。

「中学だろうがなんだろうが、本気の恋だってこと分かるよ。けどさ、思い出すたびに傷つくのはもうやめよう」

ぶっちゃけて言えば、恋なんて知らない。

だって本当は今までに好きな人できたことないんだ。

幼馴染みはいたし、仲の良い女友達だっていたけど、どれも友達以上にはならなかったんだ。

俺みたいなお調子者を好きだと言ってくれる子もいたけど、興味ないことに本当無関心な俺は跡形もなく断ってきた。

恋を知らない俺が、こんなことを言うのはお門違いかもしれない。

けれど、初めての恋。

これが恋だと分かったとき、嬉しかった。

はじめて会ったその瞬間から、もう恋に落ちていた。

俺にとっては初めての恋で、本気の恋だった。

「…忘れられるわけ、ない」

グスグス泣きながら綾音は言う。

「なら忘れなくて良いよ」

「…？」

「思い出にすれば良い」

俺はスッと手を出して、綾音を優しく抱きしめる。

綾音は驚いたように「えっ?!」と慌てた声を出す、すぐに綾音も俺の背中に手を回した。

「思い出にして、俺と新しく恋を始めよう」

柄にもなく緊張しているのが分かる。

生まれて初めての告白。

手が震えている。

「…綾音で良いの？綾音、なにも知らないよ…」
「これから知ってよ。俺も綾音のこと知りたい」
「うん…」

好きだ

好きだ

好きだって、全身が言ってる。

これが人を好きになるってことだったんだ。

しばらくして、お互い手を放して離れた。

なんだかちょっと照れくさかったけど、いつもの俺たちのようにすぐに笑いあう。

涙を拭き取って爽やかに笑う綾音が、よりいっそう可愛く見えた。

「じゃ、自己紹介しときますか」

ニツと笑いながら、俺は自分のことを語りだす。

体育館に俺ら2人

授業なんか忘れてずっとずっと笑う。

春

陽だまりの中で見つけた

愛しい人。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3084e/>

春、陽だまりの中で。

2010年10月10日07時01分発行